

基盤力

基盤教育センターは、卒業後の生き方や社会での活躍を支える人間性・主体性・社会性の育成を目的に、以下の能力を基盤力として位置づけます。

■ 豊かな「知識」

- ☐ 地域社会の課題や政策について、地域の文化・歴史、経済・産業等の魅力をふまえながら理解する力を身につけている。
- ☐ 生命や自然、環境問題の基礎を理解し、持続可能な環境共生社会の実現に向けて貢献する意識をもっている。
- ☐ 国際社会の諸問題を理解し、世界的な視野をもって行動できる力を身につけている。

■ 知識を活用できる「技能」

英語などの基礎的運用能力、情報リテラシー、資料等を読み解く技能を身につけている。

■ 次代を切り開く「思考・判断・表現力」

多様なものの見方、考え方、価値観などを理解し、思考・判断することができる。

■ 組織や社会の活動を促進する「コミュニケーション力」

個人の異なる生き方や価値観を理解し、社会と調和し、組織や社会の活動を促進することができる。

■ 社会で生きる「自律的行動力」

他者との関わりの中で自己を律し、自己のキャリア形成に向けて継続して学び、公共性、倫理性を持って行動できる。

基盤教育センター（北方） 教育課程編成・実施の方針 （カリキュラム・ポリシー）

基盤教育センター（北方キャンパス）では、基盤力を実現するために、以下のとおり教育課程を編成し、実施します。

教育課程の編成

（編成の方針）

- 1 基盤教育センターの基盤力は、高大接続をふまえ 1、2 年次の早い段階から、卒業後の生き方や社会での活躍を支える人間性・主体性・社会性の育成を目的とし、地域・環境・世界（地球）の分野を中心とする幅広い知識と英語の基礎運用能力、情報リテラシー、資料等を読み解くスキルを修得するよう順次性のある教育課程を編成する。
- 2 あわせて、多様性を理解して考察し、社会と調和して組織や社会の活動を促進できるコミュニケーション力を育成するとともに、自己のキャリア形成に向けて継続して学び、公共性・論理性を持って行動できるようになることを目指した科目群を配置する。

（教育課程の構成）

※（ ）は卒業に必要な最低単位数で、卒業要件単位数 124 単位の内訳
基盤教育センターの教育課程は、編成の方針に基づき、基盤教育科目（40）で構成する。
基盤教育科目は、「教養教育科目」「外国語教育科目」の 2 つの科目群から成り、各科目群の編成は次のとおりとする。

1 「教養教育科目」は、基盤力に対応した「地域科目」「環境科目」「世界（地球）科目」「知の技法科目」「知の創造科目」「思考と協働科目」「ライフ・デザイン科目」の 7 つの科目から成る。

- 1) 「地域科目」（2）は、地域社会の諸問題を理解し、地域の文化・歴史等の魅力や施策などについての知識を身につけることを目的とする。
- 2) 「環境科目」（2）は、生命や自然、環境問題の基礎を理解し、環境を育む力を身につけることを目的とする。
- 3) 「世界（地球）科目」（2）は、国際社会の諸問題を理解し、世界的視野に立って行動できる教養を身につけることを目的とする。
- 4) 「知の技法科目」（2）は、大学での学びに必要な基礎的な能力や、情報社会を生きるために必要なリテラシー、多様性に対応する技能などを身につけることを目的とする。
- 5) 「知の創造科目」（2）は、論理的に思考し、目の前の課題に対して適切な判断を下すとともに、自分の考えを的確に伝える表現力を身につけることを目的とする。
- 6) 「思考と協働科目」（2）は、相互理解・協働によって、集団、組織や社会の活動を促進する思考力を身につけることを目的とする。
- 7) 「ライフ・デザイン科目」（2）は、人生の幅広い選択肢に向けて継続して学び成長し続ける意欲をもち、責任ある社会の一員として行動する力を身につけることを目的とする。

2 「外国語教育科目」は、「第一外国語（英語）科目」と「第二外国語科目」で構成し、様々な文化的背景を有する人々と交流し、世界的視野に立って行動できる人材へと成長していくことができるよう、言語の4技能を総合的に向上させることを目的とする。

- 1) 「第一外国語（英語）科目」（8）は、学生の英語4技能（聴く・読む・話す・書く）を総合的に向上させることを目標とする。技能統合型の必修科目を配置するとともに、学習者の英語力に応じた科目を配置する。
- 2) 「第二外国語科目」は、基本的なコミュニケーションのための言語習得を目標に、英語以外の外国語を学習する科目とする。

※一部の学科・学類において卒業に必要な最低単位数が異なる（履修ガイド参照）

教育の内容・方法

- ・ 授業は、講義、演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより、又はこれらの併用により行う。
- ・ 学生が主体的に学び、協働して課題解決に取り組むとともに、学習意欲・関心を高め、生涯にわたって学び続ける力を養うため、課題解決型学習（PBL）、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションなど能動的学習（アクティブ・ラーニング）の手法を授業形態に応じて効果的に取り入れる。また、ICTを活用し、授業前後の学修の支援を積極的に行うことで、学生の主体的な学びを促進する。
- ・ 予習・復習等、授業時間外の学修について、学修行動調査などによる調査・把握を行いながら、シラバスへの内容記載や授業での喚起等により、適切な学修時間の確保を促す。

学修成果の評価

- ・ 授業科目の成績評価は、試験、受講態度、並びにレポートや課題、ディスカッション、プレゼンテーションへの取組状況や成果などによって厳格に判定する。成績が一定の水準に達したと認めた場合に、所定の単位を認定する。
- ・ 学生への授業評価・学修行動調査等を実施し、個別科目での学生の理解度や各講義・授業への要望をはじめ、学修達成状況などを把握し、その結果を授業や教育課程の改善に役立てる。